

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

サラワク作家のダヤク人表象

李永平と張貴興を例に

及川 茜

はじめに

サラワク出身の華語で創作する作家のうち、李永平（1947生）と張貴興（1956年生）は台湾に暮らしながらボルネオを題材にした作品を発表している。この二人の小説を例に、先住民ダヤク人が描かれた作品を取り上げ、そこに見られるダヤク人と華人との関係をたどった上で、植民地としてのボルネオの歴史を俯瞰し、ひいては台湾とのつながりの中でサラワク華人という出自がどのようにとらえ直されているかを考察する。

なお、サラワクの華語文学においては、ダヤク諸族は特に区別されず、ダヤクと総称して「達雅克」「達雅」「達亞」などと表記されることが珍しくない。本稿では特に注記しない場合「ダヤク人」の呼称でダヤク諸族を表し、文中に言及する作品でイバン人、ビダユ人、ケニヤ人などのように各エスニック集団の呼び分けがされている場合は、それぞれ原文の呼称に従うものとする。

I 作家紹介

1. 李永平 (Lee, Yung-ping)

1947年、英領ボルネオ（英属婆羅洲）のサラワク・クチン生まれ。両親は大陸出身で、廣東・揭陽を原籍とする客家人である。

1966年に小説「ボルネオの子（婆羅洲之子）」を発表、翌1967年に台湾に留学、台湾大学外国語文学系に入学する。台湾モダニズム文学の旗手のひとりであった王文興の授業を聴講したことをきっかけに本格的に創作を始め、「ダヤク人妻（拉子婦）」を発表した。卒業後、1971年より同大で助手を勤める傍ら、72年より雑誌『中外文学』の編集に携わった。

1976年に渡米、ニューヨーク州立大学で比較文学修士、セントルイス・ワシントン大学で比較文学博士の学位を得る。

1982年に台湾に戻り、中山大学で教壇に立ったのをはじめ、専業作家の期間を挟みつつ東呉大学、東華大学で英米文学を講じる傍ら、「吉陵鎮ものがたり（吉陵春秋）」「海東青」「不思議の国の朱鶴（朱鶴漫遊仙境）」「雨雪霏霏——ボルネオの幼年時代（雨雪霏霏：婆羅洲童年紀事）』『放浪——李永平自選集 1968～2002（迢迢：李永平自選集一九六八—二〇〇二）』『大河の果て（大河盡頭 上巻：溯流）¹」「大河の果て（大河盡頭 下巻：山）」「朱鶴ものがたり（朱鶴書）」を発表し、長編小説を中心に精力的に執筆を続けている。

その作品にはサラワク（クチン）の幼年時代と台湾での生活、米国留学という三つの土地の体験が反映されるが、底流として窺われるのは原郷としての中国に対する意識である。台湾での公的な評価としては、2016年3月に「国家文藝獎」を受賞したことに示されるだろう。受賞理由には「文学の才と芸術精神で台湾の小説に他地域の風土人情と歴史的視点を注入し、二〇世紀から二一世紀まで創作力が衰えずにいる」「凝縮され要を得た文体と、広範囲に及ぶ作品で、台湾文学を多面的で豊富なものとするのに深い影響を及ぼした」「1960年代から現在に至るまで、その創作量は500万字を超え、まさに大河小説の重鎮である」ことが挙げられている（國家文化藝術基金會、2016）。

2. 張貴興 (Chan, Kuei-hsin)

1956年、サラワク・ルトン生まれ。高校卒業後の1976年に台湾に渡り台湾師範大英文系に進学した。在学中に作品の発表を開始し、短篇小説集『伏虎』を上梓した後、卒業後も台湾に残り高校の教壇に立ちながら創作を続けている。短篇小説集には『柯珊の子女（柯珊の兒女）』、長篇小説には「セイレーンの歌（賽蓮之歌）」「薛理陽医師（薛理陽大夫）」「腕白家族（頑皮家族）」に加え、雨林三部作「象の群れ（群象）」「猿の杯（猴杯）」「我が慕える長き眠りの中の南国の姫（我思念的長眠中的南國公主）」がある。

同じサラワク出身で台湾在住の作家として、李永平と並び称されることが多く、日本でも2010年から2011年にかけて人文書院から刊行されたシリーズ「台湾熱帯文学」に李永平の「吉陵鎮ものがたり」と並んで「象の群れ」が収録されている。

II サラワクにおける華人とダヤク人との関係

サラワクの文学者である林武聡²は先住民を題材とした創作の困難について次のように

¹ シリーズ「當代小説家II」の1冊として2008年に刊行後、「下巻：山」の刊行に併せ「李永平作品集」として2010年に再版されている。

² 1960年クチン生まれ。1986年に星座詩社に加入、詩作に親しむ傍ら、サラワクの新聞の文芸副刊の編集も務めた。（戴小华・叶嘯，2006：236）

語っている。

「サラワクの状況を見ると、内陸の先住民（土著）同胞の困難について私たちは理解が及びにくいところがあります。多くの人々の生活環境は苦しく、将来の見通しもつかない。（中略）それに比べると、都市部の華人の生活は比較的楽なもので、先住民同胞の心のうちを理解することは難しいのです。そこに潜む問題こそが文学創作者が発掘するにふさわしい題材だろうと思います」。（林, 2010:10）³

この言葉から、沿岸部の都市に暮らす華人と内陸部の先住民とが二つの全く異なる集団として意識されていることが窺える。では、両者が交わるのはどんな局面なのだろうか。

1. ダヤク人の土地と「チナ人の町」

(1) 李永平「包囲された町の母（圍城的母親）」（1970）⁴

市街地やプランテーションといった華人の集住地はダヤク人の暮らす土地の中に点として存在しており、民族的な緊張関係が表面化する時、華人の側からはダヤク人に町を襲撃されるという恐怖が共有されることになる。

李永平「包囲された町の母」に描かれるのはこうした緊張関係である。作品冒頭で「ダヤク人（拉子）」⁵たちが町を包囲し今夜にも攻め入ろうとしていると伝えられる。早魃によって飢えたダヤクの人々が上流の町の商店を襲撃し、「中国人」⁶商人が殺害されたとの噂が流れる中、数日前には刀や斧を手にしたダヤク人が主人公の住む町にも侵入しており、主人公は深夜に銃声を耳にし、夜が明けて10人のダヤク人の死体が転がっているのを目にしていた。

主人公は五歳の時に両親に連れられて南洋にやって来たが、もう妻を迎える年頃にさしかかっている。もともと一家は「唐山（中国）」では小作人で、あるとき収穫したばかりの穀物を軍隊に徴発され、小作料が払えなくなったために南洋に流れてきたのだった。早世した父や同郷の人々は斧と鋤、そして自らの手で土地を開墾し、「ダヤク人とマレー人

³ 本稿の引用は既訳のあるものも含め、引用者が新たに訳した。以下も同様である。

⁴ 李永平（1976）所収。本稿の引用は李永平（2003）収録の本文に拠る。

⁵ 華語では一般に「ダヤク」を「達雅克」「達雅」「達亞」などと表記するが、「拉子」は口語で侮蔑的な意味を帯びることが多いようである。ただし、DayakのDがLに転訛して「拉子」となったとも言われ、必ずしも貶義を含むとは限らないようだ。梁放（2014:199-200）は次のように記している。「黄金茄（Terung Mas, Terung Asam）は俗に拉子茄と呼ばれる。茄子に黄金と名づけたのは近年のことだ。華人は拉子茄と呼ぶが、達雅茄（Terung Dayak）、つまり土着の茄子ということで蔑む意はない。反対に、イバン人は普通の紫色の茄子を華人茄（Terung Cina）と呼ぶ。どこの華人の原籍の方言か知らないが、DをLに当てることがあり、隣国の Medan は棉蘭、Bandung は万隆、こちらの Dungun は冬雲や東運ではなく龍運と呼び、Batang Sadong は砂隆河に変じ、Ludun は倫楽に、Dayak は拉雅になるのである。さらに省略すれば「拉」の字を長くのばし、「ラー」となる」。

⁶ 原文ママ。この作品では「華人」「支那人」ではなく「中国人」の呼称が用いられている。

のいうところのチナの町」(李, 2003: 74)を築き上げた。それが数十年に一度という早魃に襲われ、近隣のダヤク人たちは育てた稲が壊滅的な被害を受けたため、町に出て「中国人」の経営する商店で食糧を購入する。掛け売りを断られたダヤク人たちは飢えに耐えかねて夜陰に乗じて店を襲撃し、商品を強奪しようと試みたものの、主人公の暮らす町にはイギリス人の主導でマレー人警官が配備されており、ダヤク人たちはむざむざ命を落とすことになったのだ。

それから、二度目の襲撃を警告されて主人公と母は舟で避難しかけたものの、途中で引き返すことを決める。家に戻ってみると、外には年老いたダヤク人がしゃがんでいた。身寄りのない老人で、荷担ぎや雑用をして暮らし、学校で寝泊まりしていたが、教職員も避難して学校が閉鎖されたので行き場を失ったのだ。母が彼に豚肉と白飯を与えるのを見ながら、主人公は「年老いてしまえばみなこうなるのだ、ダヤクかチナかなんて区別はつかない」(李, 2003: 80)と考える。その日、母は農園で夜を明かし、主人公は夢うつつに銃声を聞いたように思う。夜が明けて外に出てみると、ダヤクの老人が胸を撃たれ目を見開いたまま死んでいた。そこに旧知のイギリス人が通りかかり、ダヤク人をみな追い払ったという。

ここでは町に攻め入るダヤク人の姿は伝聞でしか伝えられず、自分たちの土地にありながら生計が立てられなくなった窮境こそかつての主人公一家と共通するものの、その具体的な姿は描かれぬ。他方、ダヤクの共同体から剥落し町でその日暮らしをする老人の姿は克明に描写される。ひと碗の白飯を与えるのが唯一の接点だが、そこからダヤク人は華人にとって恐怖の対象となるばかりではなく、緊張関係にありながらも困苦を共有する同胞として捉えうる可能性が示唆されるといえよう。

(2) 張貴興「猿の杯(猴杯)」(2000)

また一方で、華人の暮らす場所から主人公が外に足を踏み出すのは、自分たちとは異なる条件のもとに暮らす他者の世界に踏み込むことを意味し、それによって物語は緊張をはらんだものとなる。こうした設定は張貴興の「象の群れ」「猿の杯」、李永平の「大河の果て」に見られるが、ダヤク人とその土地に入植した華人との関係が最も先鋭的に描き出されているのは「猿の杯」においてであろう。

張貴興「猿の杯」では、曾祖父の代からサラワク・ルトン近郊で大規模農園を経営する余一族の四代目である主人公・雉の前に、近くに暮らすダヤク人⁷一族との代々に渡る恩讐が明らかにされる。彼らが暮らすのは1860年にイギリス人商人が開拓してプランテーションを建設した土地で、1882年にそのイギリス人が殺害されたことから、主人公の曾

⁷ 作中では「達雅克」と記されるが、女性が耳たぶを長く伸ばしているとの描写があることからイバン人を指すものと思われる。「猿の杯」の前に著された「象の群れ」では張貴興はイバン人を「伊班人」と記している。

祖父が植民地政府と契約を結び代理で農園を管理するようになり、それから余家の土地となっていた。

曾祖父が開拓を始めた時、ダヤク人たちは抵抗し、三回にわたって英植民地政府の官僚に自分たちの土地に対する権利を訴えていた。しかし植民地政府の官僚はプランテーションからの豊かな収入を貪るばかりで、ダヤク人たちの訴えを聞き入れようとしない。対抗手段としてダヤク人は井戸の水を汚染し、農具や果樹園の果樹を盗み、必要な用品の供給を妨げ、放火するといった報復に出る。曾祖父は植民地政府を通じて銃で武装した警邏隊を配備し、数十人のダヤク人を牢獄に送る。しかし数ヶ月後に出獄して再び破壊を始めたため、曾祖父は発砲して犬をけしかけ、三人のダヤク人を殺害した。その報復としてプランテーションの労働者が首を切られ、曾祖父は犯人を捜し出して公開処刑し、さらに死体をトカゲに喰わせた。それによって全面的な抗争へと発展し、300人のダヤクの戦士が農園に攻め込む事態に至る。最初の衝突では7、80人のダヤク人と30名あまりの苦力が死亡したが、二度目の衝突では50人あまりのダヤク人が死亡、曾祖父の警邏隊が勝利を収めた。しかしそれで対立の火が終熄することはなく、事あるごとにダヤクの人々は余家の土地に侵入し、様々な手段で抵抗を試みる。

最後に曾祖父は殺害され、ダヤクの長老であるアバンバン（阿班班）⁸によって首を狩られる。祖父は報復としてアバンバンを殺害し、その結果、アバンバンの一族からつけ狙われるようになる。

しかし主人公の雉はそういった事情を一切知らされないまま、高校卒業後に台湾に送り出されていた。台湾で英語教師として中学校に勤めていた雉は、教え子との性関係がスキャンダルとなって辞職し、ルトンの実家に帰ってくる。そこに妹の麗妹が出産したとの知らせを受けて病院に行くが、早産で生まれた子は胎内で全身を骨折していた上、重い障害を負って生命維持装置をつけられていた。さらに麗妹は赤児を抱いて病院を抜け出し、密林に姿を消してしまう。雉は麗妹と同室だったダヤクの少女ヤニニ（亞妮妮）の助けを借りて妹を探しにバラム川を溯る。ヤニニたち姉妹の腕には、麗妹と同じウツボカズラの刺青があった。

麗妹を追って密林に入った雉は、ダヤク人たちの土地で繰り返し自分の無力さを思い知らされる。ボートが転覆して投げ出された後では、ガイドとして同行したヤニニの一族の青年バトゥ（巴都）が仲間にダヤク語で「この中国人は体力もないし軽い怪我もしてる、持たないんじゃないかな。そのときは悪いけど頼むぜ」（張，2000：119）と話すのを耳にして羞恥に駆られる。ロングハウスでは客人に対するもてなしの儀式として生きた豚が供され、雉はその豚を屠るよう勧められるが、矛でどれだけ突いても致命傷を与えられず、最後にはヤニニの手助けでようやく期待された役割を完遂する（張，2000：125）。

⁸ 以下、ダヤクの人名は原文の漢字表記に基づいてカタカナを当て、初出時のみ（ ）で原文の漢字表記を示すものとする。

ヤニニー家の暮らすロングハウスでしばらく休むことになった雉は、今度は夜中にサソリに刺されて生死の境をさまよう。実はバトゥはアバンバンの孫であり、わざとボートを転覆させ、さらにサソリを放って雉を害そうとしていたことが判明する。そもそも、ヤニニーの一族は雉をおびき出して人質にすることにより、祖父に罪過を認めさせ、さらにダヤク人を搾取して築いた富である金塊の埋蔵場所を吐かせようと企図していたのだった。彼らの土地で雉は知らぬ間に幾度も命の危険にさらされており、その都度ヤニニーに守られていたことを知る。

2. ダヤク人女性を弄ぶ華人男性

マレーシア華語文学（以下「馬華文学」とする）において、華人の目を通した他民族という題材は一つのジャンルを形成しているといえよう。馬華文学の教科書として2012年にマレーシアで出版されたアンソロジー『馬華文学文本解説』は、作品の題材に基づいて設けられた21の章に各二、三編の作品を収録しているが、その章の一つが「少数民族書写」である。マレーシアにおいて華人はエスニック・マイノリティであるが、「少数民族書写」とは彼らの目に映る「他者」こと「少数民族」と文学を通じて交流を試みたものと見なされる。アンソロジーのこの章の序文には次のように記される。

「悠久の「先住民文化」と「ジャングルの生態」という経験は、サラワクの華語作家に地方文学を称揚するに足る資源をもたらしており、「少数民族書写」はかなりの部分においてこの二つの資源が創作の題材を開発したといえる。マレーシア華語創作の領域では期せずしてマレーシアの人口が構成した歴史の形がくっきりと浮き彫りにされ、さらに具体的に作者のエスニック・グループの経験の構造を描きだしている」。(許、孫、2012: 558)

そこにはサラワクのダヤク人を描いた李永平「ダヤク人妻」、梁放「ブリーディングハート（龍吐珠）」、インド系マレーシア人を描いた張依蘋「静かなサリー（寂靜的紗麗）」の三編が収められる。ダヤク人を題材にした作品は二篇とも華人商人がダヤク人女性との間に子供をもうけた後、母子を棄てて中国ないし中国人妻のいる家庭に帰るというもので、夫に去られた妻がロングハウスに帰った後に病死するという結末まで共通する。編者の作品選択の基準についても考察する必要があるが、いずれにせよ、華人とダヤク人を一つの作品に登場させるには、不幸な婚姻が背景となるのが典型的であったと見ることができよう。ダヤク人女性が華人男性に棄てられる不幸な妻として描かれることは、同時に植民地としてのボルネオがダヤク人女性として表象されることにつながり、特に李永平の長編作品に顕著であるように蹂躪される幼い少女としての表象に発展する。

本節では上述の二篇に加えて、華人とダヤク人の婚姻を描く李永平「ボルネオの子」と張貴興「猿の杯」を取り上げ、年代順に分析する。

(1) 李永平「ボルネオの子（婆羅洲之子）」（1966 執筆、1968 刊行）

李永平が台湾留学以前に発表した唯一の中篇小説である。18歳の主人公ダルス（大祿士）はダヤク人⁹であることを疑わずにロングハウスで育ったが、実は父がチナ（中国人）であることが明らかになる。父はかつて近くで商店を経営しており、雇われて身の回りの世話をしていたダルスの母と男女の関係となりダルスをもうけた。しかしダルスが満一歳になった時、「唐山」（中国）の妻子のもとに帰ってしまったのだった。父の店で働いていたダヤクの青年ルカン（魯幹）がダルス母子の世話をし、ダルスはルカンを実の父と信じて育っていた。

出自が明らかになった主人公は、それまでの有為の青年としての立場を完全に失い、仲間たちからは排斥され、思いを寄せている少女の父からも嫌がらせを受ける。同時に、同じロングハウスからやはり中国人に嫁いだ女性が離縁されて幼い娘とともに帰ってくるが、彼女も同様に排斥を受けるばかりか、ダルスと性的関係があるように疑われて追いつめられる。

そんな騒ぎの中で主人公の親友は「なぜ君がチナで彼がダヤクだなどと言わずにはいられないんだ？ みなこの土地に暮らしているんじゃないか」（李，1968：67）と言い、主人公ははっとするが、「チナはひたすらダヤクの金をむしり取り、ダヤクの女を慰みものにして捨て、哀れな「半チナ（半個支那）」¹⁰を残してダヤク人の八つ当たりの的にするんだから…」（李，1968：67）と言ってしまう。そこに鉄砲水が襲来し、皆は山上に避難する。ダルスは避難してきた中国人商人のサンパンがひっくり返ったのを見て、水に飛び込み、中国人店員と一緒に商人を助ける。雨が上がり、主人公は恋人の少女に「もう誰も俺を半チナなんて呼ばないだろう」と言い、親友の言葉を繰り返す。少女も「そうよ、私たちはみなボルネオの子なんだから」（李，1968：78）と答える。

(2) 李永平「ダヤク人妻（拉子婦）」（1976）¹¹

主人公の阿平は「土人のおばさん（拉子）」¹²が死んだとの知らせを受ける。三叔の妻であった彼女に、主人公は二回しか会ったことはなかった。三叔が彼女を娶った時、郷

⁹ 原文は「達雅」。具体的な民族名は記されない。

¹⁰ 原文は「半個支那」。原注に「支那とは現地語で「華人」の意で、半個支那とは華人と先住民（土著）の混血である」。（李，1968：78）とある。

¹¹ 1967年に台湾大学の『大学新聞』に「土婦の血」として発表された後、顔元叔の推薦で翌68年に「拉子婦」と改題し『大学雑誌』11月号に発表した。後に単行本『拉子婦』（臺北：華新、1976年）に収められるが、本稿の引用は『迺迺：李永平自選集一九六八—二〇〇二』（臺北：麥田、2003年）収録の本文に基づくものである。

¹² 作中では「拉子」の呼称について次のように記される。「サラワクでは、僕たちは土人を「拉子」と呼んでいた。物心がついてから、この二字に含まれる軽蔑のニュアンスを感じとるようになったが、もう呼びなれてしまって改めようがなかった。しかも、もし拉子と呼ばず、もう少し聞こえのよい、友好的な名詞に替えたなら、中国人には違和感をもたらすだろう」（李，2003：51）。従って「包囲された町の母」とは異なり、本作については「土人」の訳語を用いる。

里からサラワクにやって来た祖父は激怒し、結婚を認めようとしなかったが、三叔を家から追い出すことまではしなかった。三叔は長年ダヤクの村で商売をしており、クチンに出てくるのは年に一、二回だった。彼女は色白で美しく、「唐人話」(中国人のことば)も話せた。だが伯母たちが集まると誰も彼女に話しかけようとせず、母だけがあれこれ尋ねてやるのだった。子供たちは彼女が「大耳の土人(大耳拉子)」だと言ったが、彼女は耳の長い海ダヤク(イバン)ではなく、山間部に暮らす陸ダヤク(ピダユ)の出身だった。彼女が差し出した茶を祖父は飲もうとせず、そればかりか手でひっくり返す。華人の習慣に馴染みのない彼女が跪かなかったのが理由だった。それから六年後、阿平は父の使いで妹と一緒に山中の三叔を訪ねる。三叔が18歳の娘と結婚しようとしているという噂が伝わるが、一族の女たちは彼がダヤク人妻を離縁することを喜ぶ。叔父の暮らすのは数十戸の胡椒農園を営む「中国人」のほか、数里離れたところに土人のロングハウスが点在するばかりの人里離れた土地だった。おばはすっかり老け込んで、出産した直後だというのに塩漬けの魚を干す作業に従事していた。子供たちが入ってくると、叔父は「半唐半拉」(半分華人で半分土人)と罵る。主人公兄妹はなんとか彼女を慰めたいと思うが、口を開くことができず、そのまま帰ってくる。後悔する妹に阿平は「土人なんだから仕方ないだろう」(李, 2003:60)と言い放ち、妹を悲しませてしまう。叔父が酒浸りで妻を殴っていると聞いた阿平はたしなめようとするが、「土人女は生まれつきのあばずれなんだ、一生添い遂げるなんてできるもんか」(李, 2003:61)と言い返される。彼女は不正出血が続いていたが、叔父は病院に連れて行ってやることもなく、八ヶ月後には彼女を離縁し、その四ヶ月後には中国人の娘と再婚する。さらに八ヶ月後、おばは静かに世を去った。

先住民の女性が中国人商人と結婚するという設定は「ボルネオの子」と共通するが、「ボルネオの子」に見られた希望は、台湾で書かれた「ダヤク人妻」においては影をひそめる¹³。

(3) 梁放「ブリーディングハート(龍吐珠)」(1984年)

先に引いた李永平の二作に加え、台湾ではなくイギリス留学の経験を持ち、サラワクに居住して執筆を続ける1953年生まれ作家(戴、叶, 2006:219)、梁放の「ブリーディングハート」もよく似た構造を持つ。華人とダヤク人との関係をテーマに創作する時、華人の妻となったダヤク女性の悲劇がそれだけ想像しやすいものであったことが窺われる。他方、李永平「ボルネオの子」と同様に、華人からもダヤク人からも排斥され、自らの父か母かのいずれかを否定せねばならないこうした婚姻から生まれた子供の存在をテーマとすることで、華人の境界の自明性を問うという動機が共有されていたことが考えられるだろ

¹³ 台湾の王禎和が1961年に発表した「夏日」は、台湾原住民の女性の視点から「平地人」(漢民族)の夫の裏切りを描いたもので、李永平のこの作品も当時の台湾文学における原住民女性の表象の系譜に位置づけるべきかもしれない。

う¹⁴。

語り手はケンブリッジ資格試験を経てクアラルンプールで3年間学び、それから七年間は仕事ばかりで一度もロングハウスには帰っていない。それどころか、母の存在をずっと妻にさえ隠していたのだった。10年ぶりに母に会いに帰郷する彼の脳裏に、少年時代の記憶がよみがえる。父はロングハウスを回って仕入れをする商人だった。家政婦として雇った16歳のイバン人少女との間に語り手をもうけたが、語り手が10歳の時に母子を置いて中国へと帰ってしまっていた。父は妻子を食卓にもつかせず、自分の足下にむしろを敷いて食事をさせるほど、ことごとに自分の優越を誇示していた。父の店を処分して、母はロングハウスに帰ると言うが、語り手は「あんなイバン人たちと一緒に住みたくない！」(梁, 2012: 577)と泣き喚く。しかし父は息子を華人の血を継ぐ者とは認めておらず、福建語や華語で話しかけることさえなかった。語り手は長年母の存在を恥ずかしく思っており、中学の時に骨折した彼を見舞いに来た母を追い返したばかりか、同室の友人に尋ねられて母ではないと答えたことすらあった。結婚式にも呼ばずにいたが、ついに妻に打ち明けたところ、クチンに引き取って一緒に暮らそうと提案されたので、はじめて母を迎えに行こうとしているのである。しかし故郷で彼を待っていたのは、母は子宮癌で世を去ったという知らせであった。母は龍の飾りのついた父のトランクを大切に保管していたが、中には父と語り手の写真、そして父が中国から送って来た手紙がしまわれていた。

李永平の「ボルネオの子」の主人公とよく似た設定だが、10歳まで父と暮らした記憶をもつ「グリーンディングハート」の主人公は自分を華人の側に置き、そのためにイバンの母から受け継いだ血を否定しようとする。そして一度は母を捨てた主人公だったが、生まれてきた自分の子供に母の面影を見出し、ようやく妻に打ち明けることができるようになる。

(4) 張貴興『猿の杯(猴杯)』(2000年)¹⁵

この作品では、華人とダヤク人の二組のカップルが生まれることがそれぞれ因縁の発端と結末となる。

発端となるのは、苦力の娘の華人女性がダヤクのロングハウスに逃げ、そこでダヤク人男性と婚姻を結んだことであった。小花印という少女は、余家の農園で働く苦力の娘だっ

¹⁴ なお、梁放はその後2014年に長編小説『風の中に君のすすり泣きが聞こえた(我曾听到你在风中哭泣)』を発表し、再び華人の父とイバン人の母の間に生まれた青年を主人公に設定している。しかしこの夫婦の結びつきは、華人男性によるダヤク人女性の性的搾取とは次元を異にする。その結びつきは、イギリス植民政府とインドネシア警察の双方から追われた父が、サラワク側へ逃亡中に川辺に倒れていたところを母に救われたことに端を発するものであった。婚姻は幸福なものであり、間に生まれた主人公は父をイバン語で「阿拝(アバイ)」と呼び、華文中学ではなく英文中学に通うが、後に共産党組織に身を投じる。本稿で詳述する暇はないが、こうした主人公及びその家族の造形は、馬華文学では稀な例である。

¹⁵ 本稿の引用は2010年の第二版に基づく。

だが、父が雉の曾祖父からアヘンを盗んだため、その代償として曾祖父の経営する娼館に売られていた。曾祖父の息子で雉にとっては祖父にあたる余漢は小花印に思いを寄せるが引き離されてしまう。小花印は後に脱走してダヤク人の妻となりロングハウスで人生を終えた。

小花印に対する雉の祖父の執着が、余家と「ウツボカズラの一族」の女たちとの関係を抜きがたいものとする。後年、小花印の孫にあたる麗妹という娘がいると知った雉の祖父は、麗妹の父にわざと多額の金を貸し付け、借金のかたに麗妹を引き取ったのだった。麗妹は余家の一員となり、主人公の妹として育てられながらも、ウツボカズラの刺青を持つ一族の女としてひそかにロングハウスに出入りしている。華人家庭で育ちながら、同時にダヤクの女でもある麗妹は、成長すると共に雉にとっては不可知の存在となってゆく。彼女は後に高校を中退して家を離れ、国外に出稼ぎに行ったままほとんど家に手紙すら寄越さないような生活をするようになり、台湾にいる雉は彼女の状況をほとんど把握していない。やがて彼女は麻薬所持のかどで鞭打ち刑を受けて実家に戻るが、それからというもの腹ばいでトカゲのように移動するようになっていた。出産のために入院したとき、腹部に膀胱ができていたのを発見され、雉は母と弟に尋ねて初めて妹の異常を知る。

実は麗妹は、15歳になると雉の知らぬところで繰り返し祖父から犯されていた。彼女が出産後に病院から脱走したのは、祖父からの性的虐待に耐えかねたのと、障害を負って生まれた祖父の子が延命措置を受けて生きのびることを怖れたためであった。彼女はヤニニのロングハウスで保護されており、死んだ嬰兒も埋葬されていた。

ヤニニは一族の復讐の意を受けて雉をおびき出すことに成功したものの、しだいに彼に好意を抱くようになる。一族の者の手から彼を守るために、夜な夜な雉の休む部屋で過ごし、自分が雉の妻になった、すなわち雉はもう一族の人間だという体を作る。彼女の試みは成功し、雉の知らないうちに彼は命を救われていた。最後にヤニニの口からすべてを聞かされた雉は、「僕にとって君はもう妻だ」(張, 2000: 317)と結婚を承諾する。彼がロングハウスにおびき寄せられて命を危険にさらすのは、曾祖父と祖父の残した禍根のためであり、言い換えれば華人の開拓史における原罪を贖うためでもある。代々血の応酬が繰り返されてきたダヤク人の一族の少女を妻にすることを決めたところで、華人とダヤク人との対立関係が抗争ではなく恩讐を超えた新たな局面を迎えることが期待されよう。

3. 「鱷」の殺害者——サラワク共産党とダヤク人

サラワク共産党の記憶は李永平、張貴興いずれの作品にも見られる。李永平「カラスと太陽(黒鴉與太陽)」では担任教師が共産ゲリラで、密告者の家族を皆殺しにしたためにその正体が判明して処刑され、広場に死体が晒される場面がある。「雨雪霏霏」には主人公の小学校の担任教師が夫婦で密林に入ったことが子供の(不完全な)視点から記され、

共産党の内部闘争による死がほのめかされる。そこではダヤク人が共産ゲリラの首を狩ってロングハウスに吊すといった情景が描かれる。張貴興「猿の杯」において主人公の不在の父は、共産ゲリラに加わり家を離れているらしいことがほのめかされ、彼の子を妊娠したという女性ゲリラが余家を頼ってくる場面がある。

しかし、サラワク共産党とイバン人の関係がもっとも鮮明に描かれたのは張貴興「象の群れ」であろう。

主人公の施仕才はイバン（伊班）人のクラスメート朱徳中の助けの下、ラジャン川を遡行して共産党の基地を訪ね、「鱧」を殺害する。作中では華人の象徴として龍と鱧が重ねられるが、同時に鱧は常に主人公の一家に害を為す存在として登場する。

「象の群れ」において鱧は常に龍のトーテムと並べて描かれ、鱧のトーテムは龍のトーテムの原型であると説明される。気候の変化に伴い、鱧の分布地域は次第に南下し、最後には中原から姿を消したが、伝説の中に生き延びた鱧は龍の姿へと変じてゆくのである。王徳威（2001：27）は「龍が鱧の生まれかわりであるとするなら、古代中国のトーテムの秘密はことによると未開の瘴癘の地である鱧の郷になお潜んでいるのではあるまいか？ 言い換えれば、^{ディストピア}悪郷ないし鱧郷の華人が龍族の文化を救おうとするのには名状し得ぬ正当性があるのも無理からぬことだ」と見ている。

さらに、中国からジャワ原人の故郷であるボルネオへの移住は父祖の地への帰還とみなされる（張、1998：91）。従って、鱧は龍の原型であり、ボルネオも中国人の故郷と見なされる。ボルネオ華人にとって鱧は中国と自己をつなぐ紐帯の役割を負っているといえよう。しかも、仕才が生まれた1954年からラジャン川の遡行を経て父の死が家族の秘密を明らかにした1974年という時期において、鱧の子孫を自認することは共産思想を媒介に中国との関係を保つことを意味した。

1962年12月20日、8歳の仕才は3歳の妹・君怡の世話を任されるが、彼が川辺でトカゲに気を取られていたすきに、妹は鱧に川に引きずり込まれて姿を消してしまった。妹の敵をとろうと仕才は叔父の余家同に助けを求めるが、叔父はとりあおうとしない。

「忙しいんだよ、仕才。殺したことがあるのはオオトカゲだけだし」

「ワニを殺すのもオオトカゲを殺すのも一緒だよ。イバン人だってよく殺してるじゃないか？ おじさんが一番すごいのに……」

「仕才」余家同は両手を少年の肩に置き、目を潤ませた。「お前と君怡が一番かわいがってたんだ。君怡がいなくなって、おじさんが誰より悲しいさ。でも過ぎたことは過ぎたことだ、誰もお前を責めたりしない。運命なんだ。それにもっと大事なこともあるし……」

「あのワニを殺すより大事なこと？」

「ああ、もう少し大きくなったらわかるだろう。仕才、しっかりしろよ、そのうちお

じさんのできることを全部教えてやるからな」(張, 1998: 48)

仕才がここで口にする、イバン人は普段から鱧を殺しているという言葉が後の重要な伏線となっている。余家同には鱧を殺すことはできないが、イバン人には殺すことができるのである。言うまでもなく、ここで余家同のいう「大事なこと」とは共産党組織の活動である。仕才の8歳の誕生日の直前にあたる1962年12月8日にブルネイ人民党は武装蜂起したが、一週間後に大敗を喫して指導者は国外に亡命している。すなわち、仕才の妹の事故が発生した頃、英国政府はまさにサラワクにおいてブルネイを援助して大規模な共産党狩りを行っていたのである。その肝要な時期にあつて、共産党幹部である余家同が仕才の要求に応える余裕を持たなかったのは言うまでもない。仕才はひそかに余家同の猟銃を持ち出し、単身ジャングルに分け入る。しかし途中で高熱を発して意識を失い、九日後に余家同によって発見され連れ帰られる。

19歳になった仕才は、イバン人の友人である朱徳中と手を携えてラジャン川を遡行する。仕才の四人の兄はいずれも共産党の武装部隊「揚子江部隊」に身を投じ、例外なく密林に命を落としていた。仕才は今度の旅では敵討ちに成功し、イバン人の番刀で共産党幹部の余家同を殺害し、「龍殺しの英雄」との称号を得るに至る。まさに八歳の仕才が「鱧を殺すのはオオトカゲを殺すのと同じ」といった通りであり、オオトカゲをめった斬りにするのと同じように「鱧」を屠ったのである。しかし、その肝心なときに仕才は記憶を失い、気づいたときには首と胴の離れた余家同の死体が転がっていた。朱徳中は二人で殺したのだと主張するが、仕才はただ「トカゲを一匹殺しただけだよ…」(張, 1998: 207)としか答えられない。共産党の基地を立ち去る前に、仕才は余家同の飼っていた鱧を撃ち殺そうと試みるが不成功に終わる。

仕才には殺せない鱧が、イバン人の朱徳中には殺すことができる。朱徳中は仕才と同じ学校で華文教育を受け、流暢に華語を操るほか、刀身の両面にそれぞれ鱧が浮き彫りにされている先祖伝来の番刀を持っている。だが彼らにとって中国は父祖の地ではなく、ボルネオこそが故郷である。だからこそためらいなく鱧を殺害し、中国との紐帯を一刀両断にできるのである。

III 植民地としてのサラワク

1. イギリスとオランダの遺産——李永平〈月河三部曲〉

ここまで主に華人とダヤク人との関係からサラワクの土地を描いた作品を追ってきた。上述の作品に比して、李永平の〈月河三部曲〉と名づけられた三部作「雨雪霏霏——ボルネオの幼年時代」「大河の果て」「朱鶴ものがたり」ではサラワクの植民地の歴史が前景

化されている。特筆に値するのは、ボルネオ島の植民者であるイギリスとオランダの描写であろう。

李永平は一貫して華語による創作を続けているが、英語公用語時代に教育を受けており、「イギリス植民地に生まれ、幼い頃から英語を学び、長じて後は英語で書くことを選ぶこともできた華裔作家」「南洋に生まれ、多言語教育を受けた華裔子弟」（李，2012b: 15-16）と自身の言語的な背景を語っている。

マレーシア発足の 1963 年 9 月 16 日には高校在学中であり、英国からマレーシア公民へと身分が変更されたことに対する割り切れない思いを後に次のように表明している。

「アイデンティティーからいえば、幼時よりマレーシア人である人びとは違い、わたしは大英帝国植民地で生まれ、英国の旅券を持っていました。それからマレーシアが成立し、わたしも身分が必要になったのでマレーシアの旅券を申請しましたが、自分をマレーシア公民と思うことはできませんでした。どうやって出現した国だか知れたものではありませんし、今でもよくわかりません。ですからマレーシアを離れてからも戻りませんでした、ボルネオもマレーシアの州になってしまっていますし。

アメリカから台湾に帰って教職に就いてから、台湾の旅券を申請しましたが大変なことでした。妻が台湾人なので、配偶者として簡単に発給されるはずなのですが、3年間かかって 1976 年、30 歳の時、台湾には合計 10 数年暮らしていましたが、ようやく台湾旅券を手にすることができました。取得してすぐ、台北市のマレーシア代表処に行き、マレーシア国籍の放棄を宣誓してその場で署名しました」（星洲日報 2009 年 3 月 15 日）

興味深いのは、「朱鴿ものがたり」において白人ラジャことジェームズ・ブルックをボルネオの守護神として造形し、彼の口を借りて元サラワク州首相を批判していることである。

「鴿、ある醜聞を聞いてほしい。現在のサラワクで政務を取っているダトゥ・スリ・アブドゥル・マラムッド（拿督・斯里・阿布杜馬拉目）は大規模な汚職事件の犯人なんだ！ 州首相を二〇年にもわたって務め、世界最大の最もよく茂り美しい雨林の一つであるサラワクの原生林を、九割方信じられないような安値でたたき売り、木材会社から受け取ったリベートは 100 億リングギットに及んでいる。スイスのブルーノ・マンサー基金会の報告によれば、娘のファティマと娘婿のショーン・ブランツ¹⁶を通じてカナダに設立した投資会社だけでも十億米ドルの不動産を持っているという。このアブドゥル・マラムッドというやつは、サラワク史上一番大胆な盗人だ！ 鴿、サラワクの建設者として私は行動せねばならない。神とサラワクの人々の名にかけて、この件を明らかにして不法の輩に適正な正義の処分を与えるのだ」（李，2015: 352）。

¹⁶ 原文は法蒂瑪と西恩・布朗。州首相としてタイプを直接名指しせずわずかに変更しているところ、娘夫婦の名にジャミラ（Jamilah）とショーン・マーレイ（Sean Murray）を避けているところは舞台を現実のボルネオとわずかにずらす手法であるかもしれない。

政治家とその家族の名前は変更されているが、タイプ元首相をあてこすっていることは明らかだろう。現在のサラワクの政治批判が、かつての植民者の口を借りてなされ、さらにジェームズ・ブルックが制裁を与え血で贖わせようとするという設定は注目に値しよう¹⁷。

物語の中でイギリスとオランダの存在が強く打ち出されるのは「大河の果て」（上巻 2007・下巻 2010）である。この作中では、英領サラワク・クチン出身の作家である永が、3年前に「雨雪霏霏——ボルネオの幼年時代」で新店溪の黒い淵に沈めた台北の少女朱鴿の霊を召喚し、過ぎ去った15歳の夏（1962年7月31日から15日間）の記憶を語る。彼は父からの高校合格祝いとして、インドネシアのポンティアナックに38歳のオランダ人女性クリスティーナを訪ね、彼女の農場でひと夏を過ごすことを許される。彼女はかつて日本軍の収容所に監禁され、二年の間「慰安婦」とされた経験を持つ。クリスティーナはカプアス川の水源地に連れて行くことを永に約束し、二人は30人ほどの白人の男女と共に生命の根源を求めてカプアス川の遡行の旅に出る。しかし途中で様々の不可解な出来事に襲われ、同行者は少しずつ脱落し、15日の後に二人だけでイバン人の聖山バトゥ・ティバンに登頂する。そこで永はクリスティーナによって再度この世に産み出される。15歳の少年永はこの旅路において、ボルネオ島に生きる華人としての原罪意識と、より普遍的な心の魔に対峙し、旅路の果てに生と死、そして性交の三つを経験することで新たな生を受けられる。また、成人して作家となった少年永は、朱鴿に語りきかせることで大河の旅を追体験する。その語りによって作家李永平は、中国語作家としての出発の地に帰り、ボルネオ島・台湾・アメリカの経験の集大成を遂げる¹⁸。

物語中の少年永の再生とは、中国を母に、イギリスとオランダを第二の父母とし、ボルネオ先住民であるケンヤ人のマリアとは来世で家族となることを誓い、植民地の歴史を身体に刻印されたボルネオの子としての再生である。中でも、旅の途中でサラワク博物館の館長であるイギリス人アンドリュー・シンプソンと「父子の関係にすら近い默契と交流」（李，2010：406）を結ぶくだりは寓意に富む。シンプソンは「天閨」との噂があり、性的不能者であることが暗示されるが、日本兵の凌辱によって子宮を失っているクリスティーナと同様、かつてボルネオで植民者の地位にあったイギリスもオランダももはや子孫を残すことができないことを暗示している。シンプソンとの擬似的な父子関係に加え、永がクリスティーナによって再び生み出されるということは、イギリスとオランダがボルネオにもたらした遺産の継承を意味するだろう。

¹⁷ 実際、李永平は自身がボルネオ独立主義者であると雑誌のインタビューにおいて明言している（翁智琦，2015：28）。

¹⁸ 及川（2014）に詳述した。

2. 密林の食物連鎖——張貴興「猿の杯」

他方、張貴興「猿の杯」では、サラワクの植民者（イギリス人、ひいては日本人）と先住民ダヤク人、それから華人の関係は動植物の比喻によって浮かび上がる。主人公の曾祖父は「総督」と名づけた犀と思しき巨獣を罠にかけて捕らえ、番犬の代わりに自分の土地を守らせる。「総督」はイギリス人によって両親を殺され隻眼となったが、生きのびて後は余家が植民政府と契約した土地の主として君臨していた。それを主人公の曾祖父、すなわち華人の入植者が手なずけることによって土地を自分のものとし、さらに勢力範囲を拡張してゆく。

余家に手なずけられた「総督」に対し、ダヤク人の象徴である「猿の杯（Monkey Cups）」ことウツボカズラは、華人の血で繁茂する。作中にはウツボカズラの袋の中に切り刻まれた嬰兒の死体が押し込まれている情景が、曾祖父の記憶として繰り返しフラッシュバックのように挿入される。これは1942年8月の記憶として語られ、日本兵がルトンの市立病院を襲い生後間もない嬰兒を切り刻んだことが早い段階で説明されるが、なぜそれがウツボカズラに入れられたかは物語の終盤まで明かされない。この謎が物語の主軸を為す民族間の因縁をあぶり出す働きを担っている。実は、殺戮を逃れたダヤク人の母親が病院に戻り、そこで起きた惨劇を知った後、帰り道に暑熱によって枯死寸前の巨大なウツボカズラを目にした。女はそれを救うため、他に食物となるものを見つけることができず、病院から嬰兒の死体を運んで捕虫袋に入れたのであった。切り刻まれた嬰兒の大部分が華人の子だったと語られる。日本人によって華人が殺害され、その身体で大地を潤しダヤク人が再生するという構図が読み取れる。

IV 台湾を経てのボルネオ

李永平と張貴興の二人は高校卒業後に台湾の大学に進学している。李永平の長編小説「海東青」「雨雪霏霏」「大河の果て」はいずれもボルネオ出身の台湾の大学教師が主人公ないし語り手で、名前は変えてあるが作家自身の背景を共有している。張貴興の長編小説「セイレーンの歌」「猿の杯」「我が慕える長き眠りの中の南国の姫」の主人公たちも作家と同様に台湾の大学に進み、舞台は台湾とボルネオを行き来する¹⁹。

¹⁹ 1953年のニクソンの訪台後、米国政府の援助で台湾は華僑華人学生の受入を行い、1954年から1965年まで継続された。この時期に留学した華僑華人学生は学費の全額補助に加え、往復の航空券が支給されたという。1966年から台湾駐クアラルンプール副領事を務めた蕭万長も、華文学校の卒業生を台湾の大学に送り出すようマレーシア政府に働きかけたというが、背後には反共政策があり、大学の定員枠の制約からマレーシアで高等教育を受けられない華人学生が共産党に吸収されるのを防ぐことが期待されていた。黄錦樹（2015）注19・20参照。

1. ボルネオの鏡像としての台湾——張貴興「猿の杯」

「猿の杯」で主人公の雉は台湾に送り出され、戻ってこないようにと祖父から言い含められる。それは彼を恩讐の地から遠ざけておくためだった。移民四世にあたる雉にとって、もはや祖父の代までのダヤク人との抗争は昔のことで、農園にダヤク人がしばしば侵入していることは知っているものの、その原因を意識することはない。

しかし、台湾に渡った彼も、やはりボルネオの密林の呪縛から離れることはできない。彼の眼を通じて台北の都市は密林に変じ、人間は禽獣に変ずる。作品冒頭でボルネオに帰還した彼の意識には、ボルネオの現在に、幼少年期の記憶と台北での教師時代の記憶がフラッシュバックし、同じ段落の中でシームレスに転換が行われる。

そこで次第に輪郭を結ぶのは、祖父がまだ少女の麗妹に対して犯した罪を、知らず知らずのうちに雉自身も台北で反復していたという事実である。彼はある夜、同僚に誘われて行った店で源氏名を鳳雛という少女に出会い、泥酔して彼女と一夜を過ごしていた。それが実は12歳の教え子、王小麒だったことが判明し、勤務先の学校にも露見してスキャンダルとなり、退職を余儀なくされたのだった。ロングハウスでヤニニと過ごした夜も同様に、彼は意識が混濁したままではっきりした記憶を持たない。だが、最後に彼はヤニニの一族との恩讐の全てを知った上で彼女を妻に迎えることを決める。

雉が泥酔して、あるいは高熱に浮かされて、意識が混濁した状態で少女と関係を持つという箇所は、「象の群れ」の主人公が泥酔して叔父である共産党幹部の余家同を殺害したくぐりどりと重ねることができよう。「鱈」である余家同を殺すことは中国と自己をつなぐ紐帯を断ち切ることを意味するため、意識の鮮明な状態では手を下し得ない。すると、少女との関係を持つことも、主人公の意識の表面では鱈殺しと同様にタブー視される行為だといえよう。これは未成年の教え子と関係を持つことが許されないという道徳的な規範というより、少女はボルネオの土地と重ねられるため、それを穢すことが主人公には物語上許されていないと見るべきであろう。

「猿の杯」においても華人男性がダヤクの少女を慰みものにするという構図は反復される。ルトンの華語教師でサラワク文壇の長老と目された羅老人は、高校生に金を渡して性交を迫っていたことが明るみに出て退職した後、密林の奥に隠居していたが、やはり様々な品物でダヤクの少女を誘惑することを繰り返していた。しかし、ヤニニの妹にあたる幼い双子姉妹を犯したことが露見し、男たちに袋だたきにされる。実はヤニニも病気の妹の治療費を援助するという申し出に屈服し、老人に身体を与えたことがあったということが後に判明する。

雉が台北に送り出されるのは、ダヤクの少女を犯す華人男性に成長することを避けるためである。しかし、台北に移動しても雉はボルネオ華人としての運命から逃れることはできない。台北という密林を駆けめぐる野生の獣や魚（張、2010: 99-103）として描写され

る教え子の少女王小麒と関係を持つことは、少女を犯しボルネオの土地を穢す運命をなぞることになる。「猴の杯」で描かれる台湾はボルネオの鏡像であり、主人公はそこでひとたびは自分の意志を超えたところで少女を犯す存在となるが、ボルネオに戻ってヤニニを妻とすることで、ダヤクの「ウツボカズラ一族」の一員となり、ダヤクの少女を犯す華人男性と華人男性に犯されるダヤクの少女という枠組みを超えて新たな関係を築くことに成功する。

2. 淪落の台北とボルネオ——李永平〈月河三部曲〉

李永平の長編三部作〈月河三部曲〉においても、ボルネオと台湾は二つの植民地として重ねられ、そこでは繰り返し少女の淪落が描かれている。

二つの土地を結びつけるのは朱鴿という少女である。李永平のミュージズ「朱鴿」について整理しながら、ボルネオと台湾の関係をなぞってみよう²⁰。

(1) 紅色の水先案内人

台北の少女朱鴿は、李永平の五部の長篇作品「海東青」「不思議の国の朱鴿」「雨雪霏霏」「大河の果て」「朱鴿ものがたり」に登場する。彼女が果たす役割は、自由に飛びまわり好奇心に満ちた瞳に台北の姿を映し出す小鳥から、内的世界の最深部へと導く水先案内人へと変遷してゆく。

「海東青」「不思議の国の朱鴿」では、朱鴿はそこに描き出される主人公のボルネオ華人、五の内的世界の登場人物として飛びまわる。そこで幼い少女の姿をとった彼女が象徴するのは、内なる無垢であり善である。ただし、それは成人した五の内面においてはすでに「心の魔」によって犯され穢されている。したがって朱鴿も淪落への道を歩むことが決定づけられている。同時に、外省人を父に、本省人を母に持ち台北に暮らす彼女は、台湾を体現する存在でもある。めざましい経済発展の陰で少女たちの性を搾取する台湾もまた、日本統治の陰影から抜け出し得ずにおり、朱鴿の一家も娘の性と引き換えに日本の老人から経済的恩恵を受ける。

「雨雪霏霏」「大河の果て」においても、朱鴿は内的世界の無垢や善の象徴であると同時に、台湾を象徴する。しかし彼女はすでに悪徳の都たる台北および五の「心の魔」に呑み込まれて肉体を滅ぼされており、「鴿」と同音の「霊」、ないしミュージズとして復活し、語り手の永を帰郷の旅に誘う。彼女は内的世界を外側から見つめ、聞き手として、語り手の永を過去の自身と対峙させる。

この二編で一貫して聞き手の立場にあった朱鴿は、2015年に発表された「朱鴿ものが

²⁰ 朱鴿については及川（2015）に詳述した。

たり」で自らが語り手となってボルネオでの冒険の旅を語ることになる。

「雨雪霏霏」で 8 歳だった朱鴿は、「朱鴿ものがたり」では初潮を迎える 12 歳に成長している。彼女は 1962 年と思われる『大河の果て』の舞台のボルネオに送り込まれる。

「プロローグ：朱鴿が舞台に立ち口を開く」「エピローグ：朱鴿、再び台北の舞台へ」はボルネオの冒険の旅の前後に朱鴿が台北の中山堂で行う講演の形をとっている。「プロローグ」では朱鴿が「李永平先生」との邂逅を語り、二人の対話を再現しながら自分がなぜこれからボルネオに送り込まれるかを説明する。

その目的は、「大河の果て」において主人公の永が経験した旅を朱鴿に反復させることであり、ひいては彼女を小説家にするのである。「李永平先生」は朱鴿に次のように告げる。「でも、本当の、優れた小説家になるまでには、一人で冒険の旅に出て、ハック [ルベリー・フィン] …いや、ローマ史詩の英雄のように、大事業を成し遂げる前に、自分で冥界に赴いて、死を経た後に生き返ることで、必要な鍛錬を完遂しなければならない」(李, 2015: 153)。この台詞はそのまま、「大河の果て」の永の経験の意味を解き明かしたものであることは疑いの余地がない。

だが一方で、永の旅は自己鍛錬のみが目的ではなく、使命も授かっていた。それは「朱鴿ものがたり」の中で、幽霊船に朱鴿と同乗するダヤクの青年ネルソン・ダルス・シフィリス・ビハイ (納爾遜・大祿士・西菲利希・畢) の口から明かされる。彼は「大河の果て」にも登場し、さながら梅毒の化身の如く白人の旅行者に罰を与えた。「大河の果て」で語られなかったこととして、彼が「自由ボルネオ」の首領であったことが朱鴿に告げられる。「自由ボルネオ」とは「ボルネオを解放し、ダヤクとイバンの人民を防衛し、貪婪な日本人とチナ人を駆逐し、邪悪なヨーロッパ人とジャワ人を処刑し、ブロン神の照覧のもと、公正にして大義あり、純潔にして平和なるカリマンタン自由邦を築く」(李, 2015: 498) ことを謳う武装組織である。ビハイは永と別れて 5 年後、決死隊を率いてサンガウ警察を襲撃したが、生け捕りにされ、拷問の末に 35 歳で死亡したのだった。彼は永に授けた任務を次のように語る。

「あの年の夏、大河の涯でのバトゥ・ティバン、巡礼の終点で、若い友人かつ弟分の永に俺は宣言した。「友よ、いつか君がどこにいても、英語で書くにせよ、東方の古いトーテムのように神秘的で複雑な中国の象形文字で書くにせよ、必ずこの大河の旅を忠実に、完全に余すところなく書き付けなければならない。母なるボルネオの蒙った苦難と恥辱のために、神の前で証言するのだ。旅の途上で起きた全ての出来事を、どんなに汚らわしく卑しくとも、どんなに悲惨で血なまぐさく冒 的でも、書き漏らしたり粉飾を加えたりしてはならない。永、ダヤク民族の友人にして信頼に足る友よ、これは俺がボルネオの聖山のふもとで自ら授ける任務だ。この頼みに背いてくれるな！ さもなければ、この世の果てまで、俺は——自由ボルネオの聖戦士ビハイは——君を追いかけ、この手で不忠の支

那人を、イバンの豚コレラ神シフィリスの前に生贄として捧げよう」多年の時を経て、この神聖な付託は、今なお俺の頭に残っており、一字一句ははっきりと覚えている」(李, 2015: 495-496)。

(2) 物語の呪縛からの解放

それでは、なぜこの旅を台北の少女がなぞらなければならないのだろうか。本作の内容を確認してみよう。

「プロローグ」「エピローグ」に加えて 42 話が、それぞれ 6 話ずつ 7 巻に収められている。各巻には「初めてのボルネオ」「シンガラン・ブロン神の娘たち」「ロード・ジム」「川の畔のつがいの飛燕」「幽霊船巡航記」「ボルネオの新たな伝説の誕生」「トンユー・ラルー（登由・拉鹿）の決戦」の標題が付され、各話もそれぞれが標題を有する。

オーストラリア人弁護士のパパ・オージーの亡霊は、死後なおインドネシア政府顧問を名乗り、ボルネオのロングハウスを巡っては 9 歳の誕生日を迎えた少女を見つけ、オーストラリアに迎えると騙しては犯すことを繰り返している。ボルネオのカプアス河畔に到着した朱鶴は、ロングハウスを逐われたイバンの少女イマーン（伊曼）と共に、幼い死者の暮らす「小児国」トンユー・ラルーに向かううち、パパ・オージーの召喚を受けて彼の後宮に集う少女たちと合流する。朱鶴自身もパパの魔力に屈し、ハーレムの一員にされそうになるが、間一髪でジェームズ・ブルックに救われ、彼と共に時代を溯りサラワク王国の興隆を目睹する。

朱鶴はその後、少女たちを救うために再びパパ・オージーの後宮へ向かうことを決意する。ジェームズ・ブルックから授けられた短剣と、少女の頭骨で作られた太鼓という二つの法器を手にした彼女は、旅の果てに少女たちと共にパパ・オージーを打ち倒す。そして「黄色い魔女」（姑寧・姐央／kunik dayang）とあだ名され、カプアス流域の神話となるのだった。

朱鶴が台湾の象徴であることはいままでもないが、同時にボルネオの各民族を象徴する少女たちと並んで華人としての役割を負っている。一緒に後宮に集う少女たちはケニヤ人で 16 歳のランガ（蘭雅）、バダン人のシャピン（莎萍）、カヤン人のヤサン（亞珊）、ムラナウ人でムスリムのイスミナ（依思敏娜）、陸ダヤク人のプラボン（蒲拉蓬）、プナン人のアメイシア（阿美霞）²¹である。また、途中で旅の仲間となる少女に 13 歳のバダン人のディディ・ロンボック（娣娣・龍木）がおり、失踪した姉のビダダリ（比達達麗）²²と共に頭骨を太鼓にされ、朱鶴に力を与えることになる。

「大河の果て」の主人公「少年永」は、ボルネオの少女たちが白人男性の手に落ちるのを座視するのみであったが、「朱鶴ものがたり」では台湾から送り込まれた朱鶴が後宮に

²¹ 彼女はムスリムで名前は「朝露」を意味すると説明される。

²² 名前はマレー語で「仙女」の意と説明される。

囚われたボルネオの少女たちを解放する。ジェームズ・ブルック (英国) から授けられた短剣と、ピダダリ姉妹 (ボルネオ先住民) の頭骨で作られた太鼓の法力によって最後の決戦に勝利を収めるということは、取りも直さず台湾と英国、そしてボルネオ先住民の三つの力でパパ・オージーを倒すということになるだろう。しかも、ジェームズ・ブルックに授けられた蛇型のクリスとは、ブルネイのスルタン、オマル・アリ・サイフディン二世が1841年9月24日にジェームズをサラワクのラジャに冊封した時、自ら授けた神器だと説明され、ボルネオの統治者の中で受け継がれてきたものである。ピダダリとディディ姉妹の太鼓は、二人の頭蓋骨と臀部の皮膚から作られたものだ。

「大河の果て」の少年永は、オランダ人女性のクリスティーナが日本兵に蹂躪された時には生まれておらず、ボルネオ先住民の少女たちが白人男性に蹂躪される光景も窃視するのみで何もできない。それどころか、恐怖と共に秘かな興奮を覚える。無力な少年の旅は、クリスティーナに導かれての再生によって幕を閉じる。しかし、ボルネオの密林すなわち語り手である現在の永の内的世界には、ソドムの市さながらに悪徳が蔓延し、少女たちが蹂躪され続けるままになっていた。ここで先住民の少女たちは、植民者によって収奪されるボルネオの大地と重ねられると同時に、語り手永の繰り返し穢される無垢をも象徴する。一方で、少女たちを蹂躪する日本兵や白人のペドファイルたちも、植民者の隠喩であると同時に、語り手永の内に潜む欲望にも重ねられる。

「朱鶴ものがたり」では、植民者の欲望と男性の欲望に対決するために、これらの欲望を共有しない存在としてこれまで語り手を導いてきた台湾の少女をボルネオに送り込み、「李永平先生」の内的世界の救済を試みている。

(3) 台湾の少女の「神話」

「台湾の少女朱鶴を主人公とするボルネオの神話が、ここに誕生する」(李, 2015: 784)と「朱鶴ものがたり」は結ばれる。台北の少女朱鶴は作家へと成長し、「李永平先生」の筆から解放され、少女たちを救う黄色い魔女としてボルネオに帰還する。しかし、これを台湾がボルネオを救うという構造で捉えることは不適當だろう。

朱鶴は故郷台北に家族を残しており、時にはボルネオの旅の途上に母を思いもする(李, 2015: 151)。つまり、異郷の人としてボルネオに身を置く、ボルネオの各民族にとっての他者としての華人の姿が朱鶴に投影されていると読むことができよう。さらに、大河の旅は「大河の果て」でオランダ人女性のクリスティーナから少年永に、そして「朱鶴ものがたり」で李永平先生から朱鶴に「香火を伝承する」(李, 2015: 604)すなわち衣鉢を伝えるものであった。植民者でありながらまた次の植民者によって蹂躪されたクリスティーナ、ボルネオ華人の永、台湾生まれの朱鶴へと旅路が継承され、その終着点に、華人が少女を犯す成人男性としての姿を脱し、同じ少女の姿でボルネオの少女たちと手をつなぎ、共に敵に立ち向かう役割が見出されるのである。

おわりに

サラワク出身の華人作家の筆のもと、先住民ダヤク人は華人の生活圏の外側にあつて、時折領域を侵犯して脅威となる存在として描かれる一方で、その女性たちは華人移民の現地妻として、あるいは白人の植民者から性的に侵犯される存在として、蹂躪されるボルネオの土地の象徴として描きだされてきた。

その一方で、主人公たちは自分の求めるものを見つけるために、自らの生活圏から踏み出し、つまり父祖から継承された安全なすみかの外に出て、ダヤク人の助けを得て彼らの土地の探索の旅に出る。そこでは男としての強さは役に立たず、弱い存在として自然の中にさらされるしかない。ダヤクの女性、特に少女の助けを得て、共に行動することが主人公の生死を分けることになる。また、たとえば共産党の記憶といった、華人の家族史において避け得ない題材であっても、その暗がり主人公が自ら足を踏み入れるには、ダヤク人に伴われることが不可欠でありさえする。

さらに、イギリス及びオランダの植民地としてのボルネオの遺産を継承し、同時に台湾を通じて主に高等教育の面で「華」の遺産を継承した主人公たちは、ボルネオの開拓史をなぞりながらも、先住民の土地と資源を奪い女性を蹂躪する存在としての華人であることをやめることを試み、ダヤク人との間に新たな協力関係を築くことで「ボルネオの子」となろうとしているように見えるのである。

〈参考文献〉

日本語文献

- 及川茜 (2014) 「李永平『大河盡頭』の寓意」『野草』94号。
 ——— (2015) 「紅色の水先案内人—李永平のミューズ朱鶴をめぐって」『中国』21』43号。
 張貴興 (2010) 『象の群れ』人文書院。
 李永平 (2010) 『吉陵鎮ものがたり』人文書院。
 梁放 (2011) 「ブリーディングハート」『白蟻の夢魔』人文書院。

中国語文献

- 國家文化藝術基金會 (2016) 「國家文藝獎/第十九屆國家文藝獎」(2017年6月29日最終アクセス、<http://www.ncafroc.org.tw/award-rtist.aspx?id=39448>)
 黃錦樹 (2015) 「Negaraku——旅臺與馬共」『華文小文學的馬來西亞個案』麥田。
 李永平 (1968) 『婆羅洲之子』婆羅洲文化局。
 ——— (1976) 『拉子婦』革新。

- (1986) 『吉陵春秋』 洪範。
- (1992) 『海東青』 聯合文學。
- (1998) 『朱鴿漫遊仙境』 聯合文學。
- (2002) 『雨雪霏霏：婆羅洲童年紀事』 天下遠見。
- (2003) 「黑鴉與太陽」『迢迢：李永平自選集一九六八—二〇〇二』 麥田。
- (2003) 「拉子婦」『迢迢：李永平自選集一九六八—二〇〇二』 麥田。
- (2003) 「圍城的母親」『迢迢：李永平自選集一九六八—二〇〇二』 麥田。
- (2008) 『大河盡頭上卷：溯流』 麥田。
- (2010) 『大河盡頭下卷：山』 麥田。
- (2012a) 『大河盡頭上卷：溯流』 上海人民出版社。
- (2012b) 「简体版序 致“祖国读者”」『大河盡頭 上卷：溯流』 上海人民出版社。
- (2012c) 『大河盡頭下卷：山』 上海人民出版社。
- (2013) 『雨雪霏霏：婆羅洲童年紀事 (全新修訂版)』 麥田。
- (2014) 『雨雪霏霏：婆羅洲童年紀事』 上海人民出版社。
- (2015) 『朱鴿書』 麥田。
- 梁放 (2012) 「龙吐珠」『马华文学文本解读』 马拉亚大学中文系毕业生协会、马拉亚大学中文系。
- 梁放 (2014) 『我曾听到你在风中哭泣』 獏出版社。
- (2014) 「故乡的野菜、野果」『流水暮禽』、砂拉越华族文化协会。
- 林武聪 (2010) 「走一趟婆罗洲文学的现代之旅——专访林武聪」『中文·人』第九期。
- 王德威 (2001) 「序論：在群象與猴黨的家——張貴興的馬華故事」『我思念的長眠中的南國公主』 麥田。
- 王禎和 (1993) 「夏日」『嫁粧一牛車』 洪範。
- 翁智琦 (2015) 「寫作是一趟精華的旅程」『聯合文學』2015年8月号。
- 星洲日報 (2009) 「人生浪遊找到了目的地李永平訪談 (上)」『星洲日報』2009年3月15日 (2016年6月29日最終アクセス、
<http://news.inchew.om.my/node/106020?ti=15>)
- 許文榮、孫彥庄 (2012) 『马华文学文本解读』 马拉亚大学中文系毕业生协会、马拉亚大学中文系。
- 張貴興 (1980) 『伏虎』 時報文化出版。
- 張貴興 (1988) 『柯珊的兒女』 遠流。
- (1992) 『賽蓮之歌』 遠流。
- (1994) 『薛理陽大夫』 麥田。
- (1996) 『頑皮家族』 聯合文學。
- (1998) 『群象』 聯合文學。

- (2000) 『猴杯』 聯合文學。
- (2001) 『我思念的長眠中的南國公主』 麥田。
- (2003) 『伏虎』 麥田。
- (2003) 『賽蓮之歌』 麥田。
- (2013) 『沙龍祖母』 聯經。

(おいかわ・あかね 神田外語大学)

2017年9月22日、李永平氏の逝去の報に接しました。氏の功績を偲び、ここに謹んで哀悼の意を捧げます。